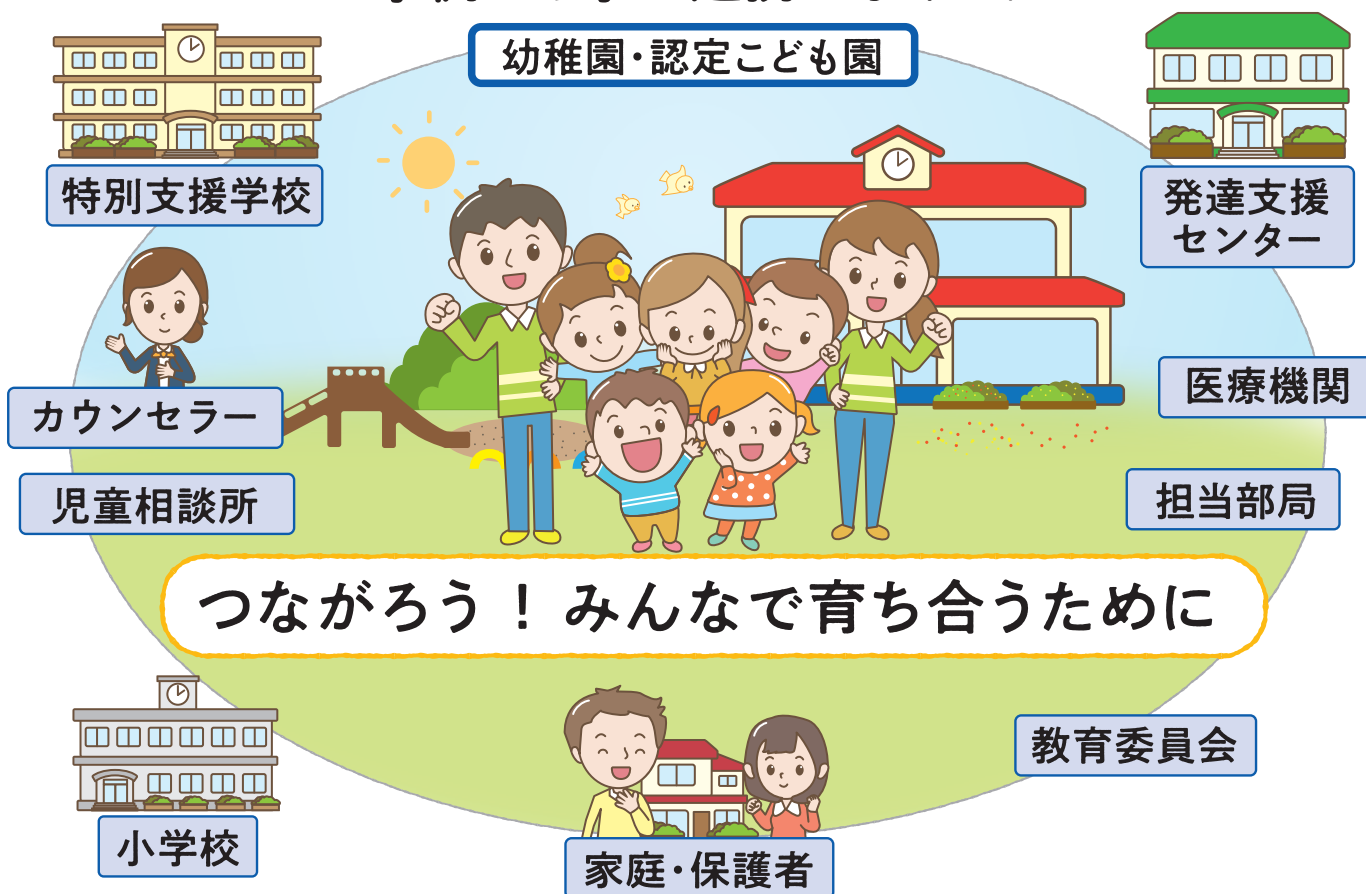


関係機関との
連携による



障害のある幼児等への望ましい指導とは

～事例から学ぶ連携のポイント～



障害の有無にかかわらず、幼児一人一人は潜在的な可能性を秘めている存在であり、その豊かな育ちを支えることは、公教育を担う私立幼稚園の使命です。特に、障害のある幼児の育ちを支えていくためには、園と家庭はもちろんのこと、発達支援センターや特別支援学校などの関係機関との連携が大切です。

関係機関との連携というと、連携の仕方が分からない、連携のメリットが見えにくい、相互理解が難しい、多忙になるなどの印象をもつ方がいます。しかし、連携することにより、専門的な助言を得られることへの安心感や共に幼児を育てる仲間意識が芽生えてきます。

本リーフレットでは、関係機関との連携に関するアンケート結果や連携の事例を掲載しています。園における障害のある幼児等の受入れ体制の強化や指導の充実の参考としてください。

※詳しくは「令和2年度 幼児教育の教育課題に対応した指導方法等充実調査研究(特別な配慮を必要とする幼児への指導の充実に関する調査研究)」の報告書(3月刊行予定:<https://youchien.com/>)をご参照ください。

公益財団法人 全日本私立幼稚園幼児教育研究機構

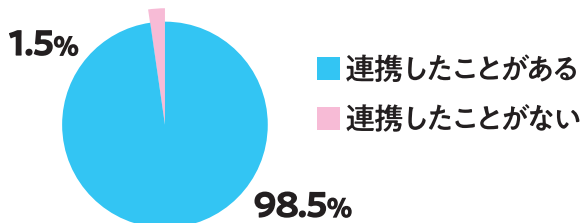
「関係機関との連携」に関するアンケート結果

全国300園にアンケート調査を依頼し、269園から回答を得、グラフにまとめました。
 なお、次ページからは、いくつかの園の取組・事例を掲載します。



グラフ①

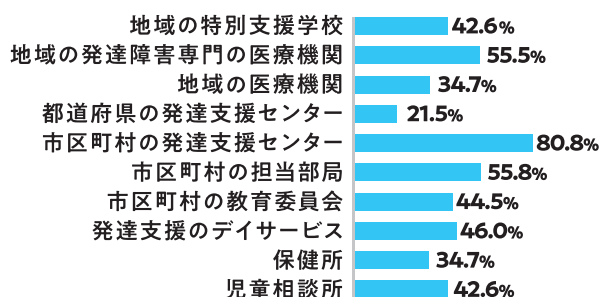
これまで関係機関と連携したことがある



本調査の協力園のほとんどが、障害のある幼児について関連機関と連携をしている。

グラフ②

これまでに園が連携した関係機関

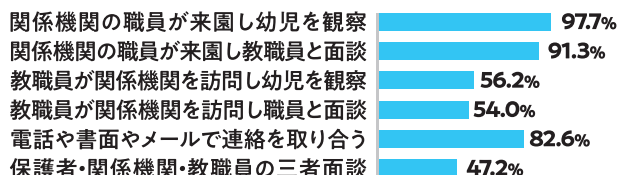


回答があった園のうち8割が<市区町村の発達支援センター(児童発達支援センター)>と連携している。

また、<地域の特別支援学校><地域の発達障害を専門にしている医療機関><市区町村(母子保健・子育て支援・障害福祉など)の担当部局><市区町村の教育委員会><発達支援のデイサービス><児童相談所>については4割から5割の園が連携をしている。

グラフ③

関係機関との連携方法

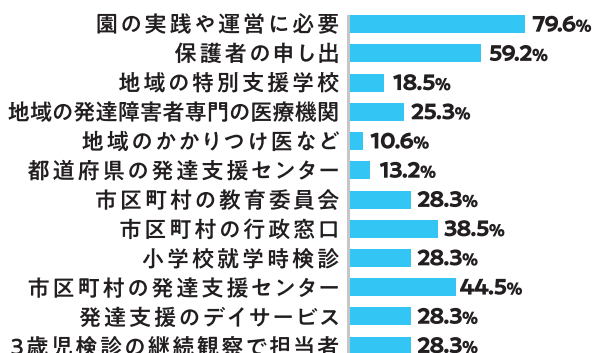


関係機関の職員が来園し幼児の様子を観察したり園の教職員と面談をしている形態は9割以上の園で見られる。

また、園の教職員が関係機関を訪問して幼児の様子を観察したり、関係機関の職員と面談をしている連携も半数以上の園で見られている。

グラフ④

関係機関とつながったきっかけ

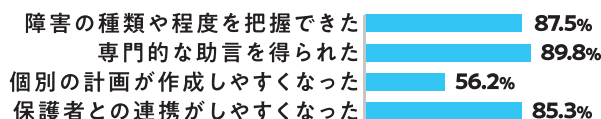


<園の実践や運営に必要であるため>と回答している園が8割近くあり、園自体が関係機関とつながる必要を感じたことがきっかけとなっている割合が最も高い。

また、<保護者の申し出から>も6割近くとなっており、保護者からの要望・ニーズがあったことでの連携も割合としては低くない。

グラフ⑤

関係機関と連携して効果が得られたこと良かったことなど



<幼児の障害の種類や程度を把握できた><専門的な助言を得られた><保護者との連携がしやすくなった>という園が8割から9割を占めており、専門的知識を得られることを効果として感じている園が多い。



保護者に寄り添う園と教職員 ～家庭との連携で大切にしたいこと～



どの幼児も育ち合う幼稚園教育の実践を通して「共生社会」の実現を図っていくために、障害のある幼児や特に配慮を要する幼児も含めて受入れて、園においてそれぞれの幼児が健やかに育つように支援をしていくことが必要です。

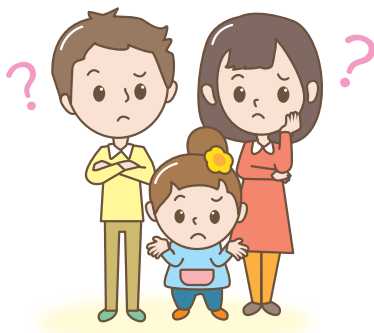
その中で、教職員は保護者と連携を図る必要がありますが、発達障害は、およそ2歳半以降の幼児期の育ちの中で少しずつ把握されていくことが多いことから、保護者として子供の発達等の障害を受入れることは難しく、園としても保護者との連携が取りにくいと感じることは多いことでしょう。

園は幼児の支援とともに、保護者の悩みにも向かい合うことになります。保護者の思いは言葉にならない場合さえあります。「保護者として障害を認めてしまうと、この子は、もう普通の生活が送れなくなってしまうのではないか」「困っていることを園に伝えたら、特別視されてしまうだろうか」「障害があると皆と仲良くできるだろうか」「就学や将来はどうなるのだろうか」などの不安や悩みがあることを園の教職員がまずは理解しておくことから、「共生社会」に向けた第一歩が始まるのではないのでしょうか。

心配な気持ちを抱えている保護者との関係を作り上げていくためには、「子供を真ん中にして、子供の幸せのために、保護者と私たちが一緒に考え、取組む」姿勢が大切になってきます。

幼児への支援とともに、保護者に寄り添い、関係をつなげていくために、また、そのことで保護者の子供の受容や理解が進むように、各園では、以下のような取組をされています。

- 保護者が悩んでいることや困っていることに寄り添うことを心掛け、育児のせいではないことも伝え支援へとつなげた。
- 園での幼児の様子を保護者に伝えることで、集団の中での姿を知っていただいた。
- 保護者の思いを大切にすることを最優先にしながら、家庭と集団での違いを理解してもらえるように日頃の連携を密にし、また保護者の不安や悩みを共有しながら幼児の将来を考えた判断ができるよう共に考えるようにしている。
- マイナスな面だけを伝えるのではなく、幼児の良さや育ってほしいことを園の生活を通して伝えている。
- 関係機関などへのつながりがその幼児にとってとても大切なことを丁寧に伝え、園生活や就学への不安をできるだけ軽減できるよう伝えている。



発達支援センターとの連携事例①

園が「仲立ち」をすることで関係機関と密接につながり、
保護者も園も幼児の困りに理解が深まる



■ つながるきっかけ「幼児の困り感への気付きと教職員の悩み」

A児は満3歳組から入園。落ち着きがなく衝動性が見られ、他児とのトラブルが多くありましたが、発語もあり指示が通ることもあったので様子を見ていました。しかし、A児は進級するごとに人間関係の難しさや、様々なことへの苦手意識を感じているようでした。また、幼稚園教育中の活動に加え、通園へも苦手意識や回避の様子がみられたため、家庭と園の両者で対応を考える必要がありました。担任も対応方法に行き詰まりを感じたため、発達支援センターの巡回相談システムを利用することにしました。

■ つながりの内容「関係機関と一緒に幼児の困り感を分析し、対応方法を考える」

センターより心理士と相談員が来園し、登園時間から2時間ほど、A児の園生活を観察。その後、A児の課題や担任の悩みに対して、原因を分析したり、対応方法を共に考える時間をもちました。

■ つながって良かったこと①「園の幼児理解と具体的対応の見通しが持てた」

A児に寄り添い、共に課題について考えていきたいという担任の思いに対し、センターからA児の行動1つ1つに、原因とみられる状況を説明されることで、A児への具体的な「園でやるべき対応」と「センターで行うべきこと」が明確になりました。やみくもに叱ったり、気を遣ったり、悩んだりすることが軽減したように思います。また、全教職員でA児への関わりを共有することで、A児の良さについても目を向けやすくなりました。

■ つながって良かったこと②「保護者の心の変化～不信感から安心へ～」

母親も、A児の発達に心配はありましたが、以前、小児科で発達障害の可能性を指摘され、投薬を勧められたことで発達診断への不信感がありました。相談方法が分からず悩んでいたため、信頼できる園が仲介となり、「A児の困り感を助け、今後に活かす」というねらいを共通に持てたことは、母親の安心につながりました。そして、理解の少なかった父親も巻き込み、家族で協力してA児に関わることができました。投薬については、発達の偏り自体を治療するものではなく、衝動性や気持ちの浮き沈みをコントロールするものなので、育ちに影響はない。育ちにともない衝動性は緩和されることが多いのでなくても済むが、服用することで、本人が生活しやすくなることを理解しておくといふというアドバイスを得て、保護者にも伝えました。

関係機関との連携がまだない親子にとっては信頼できる園が間に入ることで安心して関係機関に向かうことができる事例が多いと思われます。

【取組んだ感想】

A児への対応に不安があり、関係機関との連携を急ぎましたが、まずは家庭と関係機関、園の信頼関係が大切であると気が付きました。信頼関係を基盤に話し合うことで、A児に対する理解が深まりました。



発達支援センターとの連携事例 ②

入園前から就学までの継続した連携で、
その幼児に合った支援ができる



■ つながるきっかけ「発達支援センターでの様子から、集団生活への期待」

A児は入園前の満3歳から発達支援センターに通所しており、そこでの様子から、4歳児あたりから通常の集団生活が可能なのではないかということになりました。

■ つながりの内容＋つながって良かったこと

「入園前に園を体験することで、園に少しずつ慣れることが可能に」

センターから園へ連携の依頼があり、園で少しずつ体験保育をしながらA児の様子の変化を情報共有し、正式な入園の時期を決めていきました。8月から月2回の体験を3月まで実施。初めの2カ月は朝の2時間のみ、10月から12月までは午前中、1月から3月は給食も含め1日というように時間や活動内容を増やしていくようにしました。その間、センターと園とでA児への援助の仕方等について情報交換をしながら体験保育を進めました。

「入園後の情報共有・カンファレンスによる幼児にあった育ちへの支援」

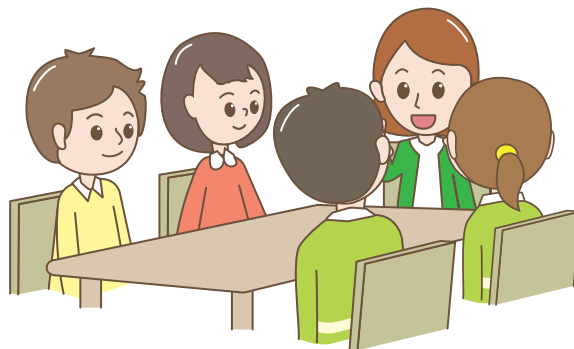
4歳児4月から入園となり、年度初めには、センターの担当臨床心理士、園長と担任、保護者とでA児についての情報交換を行い、A児の発達の特性、課題を共有し、集団生活での目標等について話し合いました。その後はセンターの臨床心理士が月1回来園し、A児の生活の様子を観察しながら担任とカンファレンスを行い、育ちと有効的な手立てについて共有していきました。その際には報告書を作成し、園でA児が頑張っている様子も保護者に伝えてくれました。

5歳児になってからは、就学について迷う保護者と話し合う機会をなるべくもつようにし、臨床心理士が保護者の心理面でのサポートもしました。就学まで、その幼児に合った場所で育ちを支えていけるよう、センターと発達課題や支援方法を共有しながら支援していくことができました。

行事の前などは、A児の取組の様子から支援の方法を相談し、事前の様子を保護者とも共有することで、A児も意欲的に行事に取組み参加できたことはとても有益でした。入園前からセンターと関わっていることもあり、担当の臨床心理士が保護者の性格等も踏まえて、A児の育ちと課題について、園と保護者との橋渡しの役割を果たしてくれたことは、効果があったと感じています。

【取組んだ感想】

入園前から保護者は集団生活への不安を抱えていましたが、関係機関と連携したことで、徐々にその不安が和らいでいきました。継続して情報交換をしたことで、A児の姿や発達の特性、課題に対する理解が深まり、具体的な支援を行うことができました。



発達支援センターとの連携事例 ③

手立ての見通しをもって教職員一丸となって
幼児の育ちを支える



■ つながるきっかけ「危険な行動が見られたことから保護者と相談」

年少組の4月、A児の行動面において高所に登る、道路に飛び出す、家の鍵を開けて出歩き保護されるなど危険な場面が見られたため、5月の懇談で母親とも相談し、関係機関を利用し発達の支援を受けることを勧めました。母親が行政の相談窓口相談し、8月には発達支援センターに定期的に通うことが決まり、関係機関との連携が始まりました。

A児には、興味関心の向くまま突発的な行動も多く、安全上の心配や認知面の幼さなどがあり、園はそれにどのように関わり指導していくか手探りでした。A児の特性の理解とA児やA児の母親に寄り添いながらどのように支援していくのかを共に考え、働き掛けられるように連携をお願いしました。

■ つながりの内容+つながって良かったこと 「状況を見ながらの定期的な連携」

A児の困りの場面が増えると、担任からセンターとの連携のニーズも増えるため、状況を見ながら保護者にも提案し、定期的に連携しています。電話での相談をはじめ、センターの担当者が来園し、A児の様子を観察した後、担任とカンファレンスを行う方法、また、担任が特性の理解と幼稚園教育に生かすために、センターでのA児の様子を見に行くこともあります。

「連携により関わりを工夫したことによって生まれた、幼児の安心感や意欲」

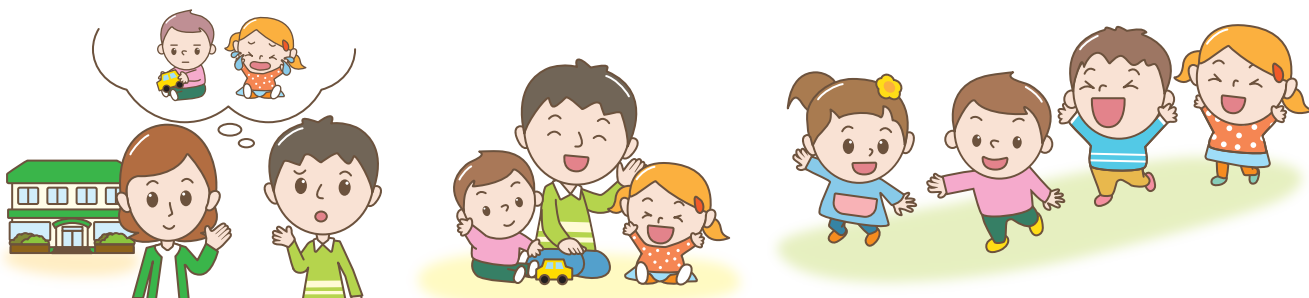
センターとの連携が進む中で、A児が教室で過ごしたくない時は、別室で担任以外の教職員が絵本を読みながら一緒にゆっくり過ごせるようにし、絵本が終わったら教室に戻ろうなど、見通しをもって関わるようになったことで、A児は安心感を得て、時折教室で過ごせるようになってきました。また、生活面での身の回りのことについても、「準備」という言葉を嫌がるのであれば使わず、好きなキャラクターに「変身」と言うなどのアドバイスを生かして関わることで、「変身」を楽しみながら朝と帰りの準備や給食の準備、片付けなどを行うようになってきました。

幼稚園教育の方向性を確かめ、次の手立てへの見通しが持てていることは関係機関との連携の効果だと思います。

今後は、センターと連携した内容や具体的なアドバイスを園の教職員間で共有することで共通認識や関わり意識をもち、一層組織としての取組を強化していきたいと考えています。A児を真ん中にして、家庭、園、センターとが一体となって協働し、A児の笑顔と育ちのために努力していきたいです。

【取組んだ感想】

どのように関わり指導するか分からず手探りの状態でしたが、関係機関からA児の姿や時期に応じた具体的なアドバイスをもらえることで、心強く感じるとともに、園の方向性が明確になり安心することができました。



特別支援学校との連携事例



巡回相談による的確なアドバイスで 幼児の生活がスムーズになる

■ つながるきっかけ「幼児と教職員の困り感」「保護者の相談に答えることの難しさ」

幼稚園教育の中で「A児が集団生活に馴染めない」「少し教職員の指示が通りにくい」と感じたり、「A児自身も園で過ごしにくい」と感じているのではないかと思うことがありました。保護者からも相談を受けますが、困っている内容に的確に答えたり、園での対応などを話すことが難しいと感じていました。

■ つながりの内容「巡回相談を活用することでの物的環境や言葉掛けの工夫」

そこで、県の私立幼稚園団体と特別支援学校が連携して実施している「巡回相談」を活用することで、特別支援学校の教職員が来園するようになりました。表現活動や運動などを指導するときに園の教職員が配慮すべき点や、自宅での保護者の関わり方について特別支援学校の教職員から具体的にアドバイスがありました。

それらのアドバイスを参考に、園では物的環境を整えたり、教職員の言葉掛けの仕方を変えたりしたことで、A児の反応が変わり、教職員が適切な支援の仕方を考えるきっかけとなりました。

■ つながって良かったこと「教職員や友達との距離が近づき、自己発揮する姿が増えた」

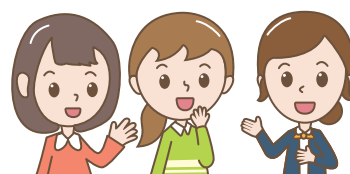
その結果、周りで関わる友達や教職員との心理的な距離が近くなり、A児も自分の成功体験が増えることで笑顔が増え、周りの友達と関わろうとするなど、様々な面での効果は大きかったと思います。また、「A児に何度言っても、朝の支度ができない」と困っていた保護者も、アドバイスを聞いて実践したことでA児の姿が変わり、「イライラしたり叱ったりすることが少なくなって、心の余裕が生まれた」と話していました。

現在は年1回で相談していますが、必要があれば、いつでも電話で相談できるという安心感があります。

【取組んだ感想】

保護者に伝えにくかったり上手く説明ができなかったりすることについて、専門的な見解からアドバイスを受ける仕組みを探していました。巡回相談でのアドバイスを園の教職員で共有したことにより、全教職員がA児に対して同じように対応できるようになり、園生活がスムーズになったと感じています。

カウンセラーとの連携事例

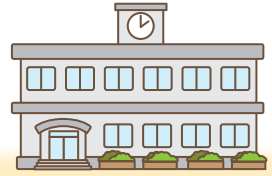


県の私立幼稚園団体と県の臨床心理士会の共同事業で、定期的に決まった臨床心理士(カウンセラー)が園を訪問するといった取組があります。カウンセラーは、幼児と関わりながら様子を見る(参与観察)、保護者との面談、教職員と幼児理解を共有する(コンサルテーション)、研修をする(教職員や保護者向け)といった対応をします。

コンサルテーションでは、教職員はカウンセラーに困りや迷いを話すことで幼児への気付きを深めたり、共に考え、アドバイスを受けることで関わり方の自信につながっています。

小学校との連携事例

小学校教育への接続に当たり 必要な支援について考えていく



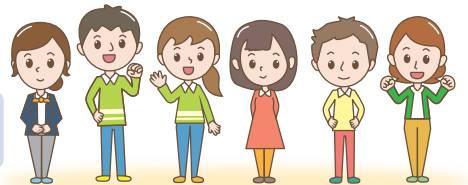
障害のある幼児を、小学校へどのようにつなげていけば良いのか悩みますね。

小学校学習指導要領(平成29年告示)では、「障害のある児童などについては、学習活動を行う場合に生じる困難さに応じた指導内容や指導方法の工夫を計画的、組織的に行うこと。」となっています。園で育ててきたことを小学校教育につなげていくためには、園は障害のある幼児の姿や園での学び、どのような支援を行ってきたかを小学校に伝え、小学校ではそれらの情報を参考にし、個別の指導計画を作成します。このように、園と小学校が共に必要な支援等について考えていく姿勢が大切です。小学校、家庭、園が連携して必要な情報をどのように小学校へ提供しているのかを紹介します。

- 小学校に出向いたり、小学校教員が来園したり、電話を活用したりして、情報共有している。
- 就学相談員に来園してもらっている。
- 3月に園、小学校、関係機関が集まり支援会議を行う。
- 家庭、園、小学校が集まり、個別の教育支援計画の引継ぎを行う。
- 就学後に役立ててもらうために、要録とは別に個別の指導計画や園独自の就学支援シートなどを添付して渡している。
- 幼保小連絡協議会(合同研修会)や就学前連絡会で小学校に伝える。
- 幼児、児童が小学校や園で年数回交流し、その場で情報伝達をしている。
- 小学校就学後も支援会議などで小学校担任と情報交換をしている。



関係機関とのよりよい連携に向けて



幼稚園等において障害のある幼児を受入れ、指導していくうえで、地域及び医療や福祉、保健等の業務を行う関係機関と連携を図っている事例をいくつか紹介しました。

関係機関と連携することで得られる効果としては、次のようなものが挙げられます。

1. 幼児の実態や障害への理解、幼児自身の困り感への理解が深まる
2. その幼児に応じた支援の方法を知り、支援の計画が立てやすくなる
3. 教職員が安心して指導や支援をすることができ、教職員間の連携が進む
4. 幼児が安心して生活できるようになり、幼児の育ちが見られる
5. 保護者への対応や支援の仕方を学び、保護者との共通理解や信頼関係が生まれる

関係機関と連携することで、教職員も保護者も幼児も共に育つことを考えると、今後も互いの立場を尊重し合い、様々な課題を解決しながら、よりよい連携を図っていききたいものです。

※すべての連携において、個人情報の取扱いについては、十分ご注意ください。